

孫文蓮について

池上正治 *

はじめに

前世紀、20世紀の初頭、アジアの空には黒い雲がたちこめていた。中国の未来を模索する孫文は、活動の拠点の1つに日本を選んだ。当時の日本には、それぞれの立場から、孫文の革命活動を支援する動きがあり、企業があり、個人がいた。実業家の田中隆もその1人で、孫文に巨額の献金をした。孫文はその返礼に、4粒の蓮の実を田中に謹呈した。この蓮の実が、発芽し、開花して、「孫文蓮」と名づけられたのは、40年後のことであった。

孫文と日本人の幅広い交友

孫文（孫中山 1866～1925）は、日本で高い知名度をもつ中国人の1人である。その理由は、彼が日本をよく訪れ、多くの日本人と交友を結んだからである。最初の来日は、1895年、広州蜂起に失敗した直後のこと、孫文は29歳。最後は1924年、それは死の1年前で、神戸で「大アジア主義」の講演をした。孫文58歳。この間、孫文の日本滞在は計9年にもなり、彼の人生の6分の1以上にあたる。孫文が登場する日本の書籍やテレビ番組は少なくない。

孫文が交友をもった日本人は、政界・財界・思想界・学術界ときわめて幅広い。総理大臣（第29代）犬養毅、財閥の安川敬一郎、思想的に共鳴した宮崎滔天や頭山満、学者の南方熊楠などがある。孫文はその『建国方略』の中で、これら日本友人の多くの実名をあげ、彼らに対して深い感謝の意を呈している。それは中国の未来を模索する孫文にとって、日本の友人たちは不可欠の存在であり、彼らの支援が絶対に必要だったことを物語っているだろう。

4粒の蓮の実は「君子の交わり」の証

孫文の革命活動に対し、資金的な援助をした日本人は少なくない。それには孫文の思想と行動に共鳴した個人たちだけではなく、中国で経済活動をしようとする企業も含まれる。「金を出し、口を出す」という、今にして思えば、ごく一部の個人を除き、孫文への献金は意図的なものであり、一定の見返りを期待してのものだったようだ。政治的な「投資」だったのである。

しかし、ここに1つの例外がある。田中隆（1866～1935）は、第一次世界大戦を背景に、海運会社を興し、巨万の富を築いた人物である。田中は、1913年（大正2）頃、第2革命に失敗した失意の孫文と知り合う。孫文の境遇を知り、その思想に共鳴した田中は、孫文の求めに応じ、300万円と汽船（長府丸）を提供した。当時の300万円はいまの50億円に相当し、3億RMB以上である。長府丸はドイツ製の汽船で、孫文の革命活動には必須のものだった。これらの資金および物資の提供に対し、田中は孫文から領収書というものを求めなかった。

* Ikegami Shoji 1946 生 東京外国語大学中国科卒 作家・翻訳家 s_ikgimi@ybb.ne.jp
日本・蓮文化研究会理事 中国・花卉協会荷花分会名誉会員
著書に『世界花蓮図鑑』『蓮100の不思議』など、訳書に『中国老人医学』など、総計60余冊。

1918年(大正7)、第3革命に失敗した孫文はまたも日本に亡命した。下関市の大吉楼に、「中山樵」という変名で潜む孫文を、田中隆が訪れ、慰問した。失意のどん底にあった孫文は、白い絹に墨書した「至誠感神」と、小さな紙袋にいれた4粒の蓮の実を取りだし、こう告げた。

「田中先生、これは中国から持ってきた蓮の実です。私の故郷のものです。中国と日本は、この1本の蓮の根のうえに咲く2つの花のようではなればなりません。また中国と日本とは、この蓮の根のなかの糸のように、いかなる外国の力をもっても切り離せないでしょう。古来中国では、牡丹は富貴を、菊は隠逸を、蓮は高潔な君子の交わりを、それぞれ意味します。今日の契りに、この蓮の実を田中先生に贈ります。どうか花を咲かせて下さい。この実が花を咲かせる頃には、中国も革命に成功し、東洋には平和が来ることを確信します」

発芽・開花、命名、「蓮の実会」

それから40年以上の歳月が流れ、田中家の金庫の奥深くに保管されていた蓮の実を思いだしたのは、田中隆の子息・隆敏(1905～1984)だった。孫文からの蓮の実のことを、彼は「蓮博士」大賀一郎(1883～1965)に相談した。大賀は戦前、満鉄調査部の植物班主任として古代蓮を研究し、「南満州普蘭店付近の泥炭地に埋没し今尚生存せる古蓮実に関する研究」で、東京大学の理学博士となっていた(1927年)。1951年(昭和26)、大賀は千葉県の大賀川の遺跡から、2000年以上前の古代蓮の実を発見、その発芽と開花に成功した。これが「大賀蓮」である。大賀蓮の話題は、翌52年、米国の写真報道誌『ライフ』で取りあげられ、海外でも話題になった。

1962年(昭和37)、その大賀一郎の手により、孫文の4粒の蓮の実のうちの1粒が、発芽し、開花した。関係者の喜びは大きく、新聞にも報道された。田中隆敏は大賀と相談し、この蓮を「孫文蓮」と命名した。孫文蓮はその後、田中家で美しく咲き、周囲の公共施設などに株分けされることになる。田中隆敏はまた、「蓮の実会」を組織し、「善隣第一主義を志向し、日中両国民族の理解を深める」(規約第一条)運動を展開することになる。

孫文蓮は中国へは、1968年に北京の中山公園、1979年に武漢植物園、1986年に台北の故宮博物院、それぞれ関係者の尽力により株分けされている。

おわりに

革命の活動資金を必要としていた孫中山と、田中隆をふくむ日本の多額献金者。当時の時代を考えると、両者の間に複雑な思惑が交錯していたとしても、それは不思議ではないだろう。ただ、孫文のいう「至誠感神」「蓮は君子の交わり」などは、古今東西に通じる真理である。孫文蓮は、そうした歴史的背景をもつ貴重な植物であり、まさに日本と中国の間の「君子の交わり」の鉄証である。この孫文蓮を、永遠に育成し、その意義を伝えていきたいものである。

主な参考文献：

河合貞吉「孫文の蓮の実」『日本週報』昭和34年(1956)6月4日号(第483号)

古幡光男『孫文蓮について』1994年

「孫中山の郷里に名蓮あり」李素霞・李尚志・孫梓源・彭妙英 2012年 中国第26回花蓮展
&蓮学シンポにて発表 日本蓮文化研究会誌『蓮に笑み』17号(2013)所収